

どの格闘技であっても、誰が一番強いかなど、全盛期同士が闘わねばわからないものだが、人には記録、あるいは記憶というものがある。

しかし、歴史の長い剣術については、その思想や信条はともかく、技術については、その人が亡くなれば消えてしまう。だから、いかに褒め称えようと、実際に「見た」人がいなければ比較のしようがない。たとえば、剣術が盛んであった戦国時代と、太平の江戸時代と、そして再び盛んになった幕末から以降と、それぞれの比較はできない。伝説なら話はわかる。塚原卜伝、上泉伊勢守、宮本武蔵の誰が強かったか、など、小説の世界なら比較可能であるが、実際には無理である。その後に数え切れないほど出現した名人・達人の「逸話」ならいくらでもあるだろうが、それと「強さ」とは、関連があるかどうか、よくわからない。たとえば、宮本武蔵など、史書をあたって、10数行しかないであろう、と吉川英治氏は語っている。武蔵は「見切り」という言葉を考えたのだが、佐々木小次郎との巖流島での闘いのとき、鉢巻だけを切られて額には傷がまったくなかった。それを、少しは切られたらと言う人に、「見られよ！」と迫ったという。また、飛んでいる蠅を箸でつまんだとか。

名人・達人を何人か列挙すると、富田勢源、東郷重位、小野次郎右衛門、柳生一族、伊藤一刀斎、榎本法神……もう切りがない。

江戸時代中期から後期になるのだろうが、ボクの好きな逸話がある。

榎本法神のことで、百歳を超えてからも弟子に向かって隙があったらいつでも打ちこんできてもいい、と言いつつ、眠っている時や後架にいるときを狙った者、食事中に背後から襲った者、いずれも取って押さえられるのが落ちだった。ついには、誰も狙わなくなった。事実かどうか別だが、168歳まで生きたという。(この証拠が、祖父は剣を、倅は医術を、孫はまた剣を学んだ、須田房之助一家がいる。この孫が道統を継いだ。)百歳を超えて、深山に入って霞を食べて生きている、といわれた。金沢の出身だが、若い頃の武者修行中に長崎で漢方医学を修得し医師としても一流で、師匠の中国人とともに中国まで行ったというし、京都では易占術にも通曉し、これも一流になった。全国を歩いているうちに、赤城山の見えるところが気に入ってここに居を構えた。このとき、すでに百歳を超えていたという。あるとき、どこやらからの帰りに、川の堤に立って、気持ちよく放水していたとこ

ろ、「今なら大丈夫だ」と二人で突き落とそうとしたら、あべこべに川に落ちたのが弟子の方で、「せっかくだったにのう、気の毒した。早う上がらぬと風邪をひくぞ」そして悠々と放水を終えて立ち去った、とある。もともと赤城山のあたりは、無医村で、随分重宝がられた。金のあるものは、5文。ないものはただ。易占もただ。つまり、無欲恬淡。

唯一一本とられた話。酔って帰った時、足を洗う湯が熱かったのでおさわという下女にぬるくしておくれ、といった。おさわが「そいじゃ水をうめましょう」といい、手桶の水をたらいにあけたところ、このおさわが賢い女性で、さらに熱湯を足したのである。「熱っ」と飛び上がった話があり、さすがの法神も「まいった！」と言い、下女がついに一本とった形になった話が残っている。どこまで本当かよくわからないが、(賢明な女性の周囲には)ありそうな話ではある。法神唯一の敗北という。法神流を興し、二代正統を継いだのが先の須田房之助である。この流派から、昭和になって持田盛二範士がでて日本一になり、剣聖と言われ、のち初めての十段位になった。

戦国時代と幕末と比較しても意味がない。江戸時代は、もともと刃物を使うことが少なかったのではないか。江戸府内での抜刀は禁止されていて、火事かなにかのときに、機転を利かせた武士が壊れかかっている橋を群集が渡ろうとするのをくい止めるために抜刀して橋を渡れなくして、大勢を助けた。ところが、御定法は御定法で、結局切腹になってしまった。

だから、この時代は、木刀による型稽古か竹刀剣法か、いずれにおいても、名もない名人・達人が数多く出現していたに違いない。

剣術あるいは撃剣がさかんになったのは、幕末だろう。必要に迫られてのことである。武士に限らず、百姓・町人までもが道場に通うようになった。江戸だけで何百と道場が開かれたはずである。この頃になれば、「目撃者」が明治や大正時代、さらには昭和まで生存していたから、かなり信憑性がでてくる。竹刀剣術ではからきしだが、真剣勝負となると、また違った評価が現れてくる。江戸では、直心影流(男谷信友ら)、北辰一刀流(千葉周作)、神道無念流(岡田十松、斎藤弥九郎ら)、鏡心明智流(桃井春蔵)、心形刀流(伊庭八郎ら)などが門人を多数集め賑わった。富士浅間流の中村一心斎など、白扇一本で並み居る水戸藩士を汗ひとつかかず総なめしたというし、北辰一刀流の名を聞いた時、右に出る流名は他にないと、褒めた。山田次朗吉がつねに、中村一心斎を日本一の剣客だ、と言ったとい

う。上の流派の中でもっとも繁栄したのは、北辰一刀流で、弟子の数が延べ 10000 人という。周作は、「お釈迦さまや孔子の弟子は 3000 人というが、その倍の門人がきてくれた」ことを感謝・感激している。

それぞれの流派の顛末を書けば、優に一冊の本が書ける。当たり前のことで、人ひとりの人生を丁寧に追いかければ、それぞれの歴史がある。

これらの道場から、自然発生的に定期的に撃剣会をおこなうようになり、それぞれの流儀の名誉を賭けて闘う（無論竹刀でである。）ことになる。幹事がいて、次は誰と誰を試合させるか、など相談しながら決めていたらしい。

ここで無敗のまま通したのが千葉周作の次男、千葉栄次郎で若くして名人と言われたが、水戸藩に指導に行った帰り名もない旅籠で、コレラか何かのはやり病のために客死した。異説があり、発熱をしてなんとか帰宅したが、腸チフスか肺炎だったのでは、といわれている。わずかに 30 歳。・・・誰それに勝った、とか言ってもああそうですか、と言うだけである。そうではなくて、次のような話の方が説得力がある。鬼鉄と呼ばれた山岡鉄舟が若手の中では強い部類にあった。そこで、いかに若先生が強いといっても、われわれが入れ替わり立替わり相手をすれば向こうは疲れてきて最後に自分ができれば、勝てるはずだ、というような計画を立て、20 数人が実行した。鬼鉄がヘトヘトになって一本取られたあと、懲りない弟子の誰かがかかっていると、「オーイ、替わりの竹刀を持って来てくれ」と栄次郎が叫ぶ。竹刀が柄の半ばから折れていた。つまりは、鬼鉄は、栄次郎からみれば、折れた竹刀であしらわれた程度の実力しかなかった。しかも折れていることに誰も気がつかなかったという。その頃の鬼鉄は、最後に自分がでて、というから、突きが得意でかなりの腕前だったというから、栄次郎がいかに強かったか、という話になる。

千葉周作が 60 歳のとき、山岡鉄太郎と稽古したら手も足も出なかった、という。山岡という男は不器用な男で、二代目浅利又七郎にも手も足もでず、結局は禅に救いをもとめ、荒稽古で有名な春風館を興した。・・・高野佐三郎が一時いたというが、ずっと居たわけでもない。剣禅一如を具現した。このとき、さきの浅利又七郎に日本一の折り紙をつけられた。

千葉周作の話では、驚くような話がいくつもあるが、(司馬遼太郎：北斗の人) 中西道場で必死の稽古をしていて、寺田五右衛門の型稽古や、高柳又四郎の音無しの構え、あるいは白井亨を破らなければならない。周作は刻苦精励、稽古中にあまりにも力を込めて踏み込んだところ、高々と高柳の竹刀が音立てたが、同時に一寸二分（厚さ 3.6cm）の床板を

踏みぬいた。師匠は、その周囲を切り取って保存したという。高柳の音無しの構えというのは、いくら必死になっても竹刀に触れることもできないくらい強かったので、そう呼ばれるようになった。・・・世界で一番長い小説を書く、と言った中里介山の小説「大菩薩峠」の机龍之介のモデルである。富田勢源は、晩年になって眼病を患い、ほとんど盲目になった。それでも、剣術の力は衰えなかった。後世にも同じような話がある。

この撃剣会などを通じて記録を辿ると、幕末でもっとも強かったのは、神道無念流初代齋藤弥九郎の弟子の**仏生寺弥介**である、といわれる。(筆者註：今どこの本をみても「弥助」になっている。字面からみて、また字の読み書きができなかったことから「弥介」の方が妥当だと思うのだが、今回は弥介で通す。この頃の名前というのは、かなりいい加減で、沖田総司もいつか沖田総二と書いていたと言うし、齋藤一も会津にいた頃、山口次郎(二郎)を名乗っていた。字を書くことが出来る人が少ない頃には、名乗りを聞いた時点でそのとき思いついた字を書いていたから、渡辺、渡部、渡邊、渡邊などが今でも残っている。また、振りがなを振っているのだが、いろんな読み方があって、どれが正しいのかよくわからない。何冊も読めば余計にわからなくなる。)この頃は足がらみも使えた(現在は禁止されている。)ので、「仏生寺一流！」と言いながら相手の顎などを蹴り上げたという。相手は無論失神するかふらふらになる。真剣勝負の場数も踏んでおり、最強であったことは間違いなさらしい。新撰組の暴君芹沢鴨が子ども扱いされたという。その話というのは、芹沢鴨は神道無念流戸ヶ崎熊太郎と岡田十松門下で師範役を勤め免許皆伝、暴れ者で真剣勝負も幾度も経験しており、のちに新撰組の局長になるくらい、人格はともかく、剣術の力は相当なものだったようだ。これに対し、「お面頂戴！」と宣告してから面をとるのだから、余程に力の差があったのは間違いなさ。ただ、眼に一丁字もなかった。(実際の師匠は、同じ仏生寺村出身の初代齋藤弥九郎ではなく、その上のご隠居と呼ばれた30代の岡田十松利貞だった。)本人に字を学ぶ姿勢がまったくなかったことや身分が富山県の片田舎の百姓出身だったこと、二代目齋藤弥九郎(新太郎)などよりはるかに強かったため嫌われたことなどから、どこかの藩の指南役などにはなれなかったし、なる気もなかった。**近藤勇**の天然理心流は型稽古が主で、竹刀剣術には弱かったので(沖田などはまだ若すぎる頃)、道場破りが来ると、神道無念流の渡辺昇師範代に来てもらったりしていた(これを、近藤のような道場主が依頼するはずがない、と否定する人もいる。つまり、渡辺の自慢話だ、というわけである。・・・今となっては、確かめようもない。)が、渡辺がいないときには、仏生寺弥介が呼ばれることも多かった。すると、近藤の師匠まで見物に来て、なにせ

段違いの強さを見せる弥介の剣術は痛快だから好かれていた。「お面頂戴！」といい、面をとるのだ。一撃で意識が遠のく。道場破りがほうほうの体で逃げるように帰っていく。弥介は、丁寧に教えてくれるから練兵館道場の若い連中には好かれていた。(津本陽氏がいう、段違いの腕前の剣士に面を打たれると鼻先にツーンときな臭い匂いがする。)弥介の面もそうだったろう。中国地方最強と自慢していた岩国の宇野金太郎に、突きを得意とする師匠の三男の歎之助(鬼歎)が敗れた。手紙を書いて弥介に助けを求めてきた。好き嫌いを言っている場合ではなかったらしい。急いで中国地方に出かけた弥介が宇野を相手に、「お面頂戴！」と軽く面をとる。二本目には相手も警戒するが、やはり「お面頂戴！」と面をとる。相手は混乱する。三本立て続けに面をとられると、錯乱状態になるらしい。この頃の試合は十本勝負が基本である。それでも三本立て続けに面をとられたら、頭も混乱するだろう。宇野はここで諦めた。この宇野は、「宇野の泣き籠手」と称され、桂小五郎(やはり練兵館塾頭)が籠手をとったあと、2本目で籠手を打ち返され、その場から試合ができなくなり、手がしびれ、数日間箸ももてないほど役にたたなかった、という。その宇野でさえ段違いの腕前だったというのである。

弥介の最期は、二代目斎藤弥九郎(新太郎、つまり、師匠よりも遥かに強い)のため、しびれ薬を飲まされ、殺害された。芹沢や近藤らと交際していて、つまりは敵にまわすと手強過ぎることにあつた。あるいは、用心棒をしたりしていたともいう。(一説に泥酔していたところを撃たれたともいうし、首尾よく逃げたが、行方不明になった、という説もある。)ちなみに、二代目と芹沢がほぼ同程度の強さで、あるいは芹沢の方が強いかもしれないと弥介は思った。真剣なら間違いなく芹沢である。……ということで、どうやら仏生寺弥介最強論は、本当らしい。つまり、技量が下のものからみれば、相手が自分よりは強いことはわかるが、どれほど強いかは想像もできない。ところが、上からみれば、どの程度の技量かはわかるという意味である。

幕末三剣豪をインターネットで検索すると、**男谷信友、島田虎之助**、と大石進か、誰やらか、のうちの三人だという。どの出典を参考にしているのか知らないが、多分せいぜい一冊か二冊だろう。……ボクは、この文章を書くために海音寺潮五郎、子母澤寛、司馬遼太郎、藤島一虎、小山龍太郎、津本陽、原康史各氏をはじめ、いろんな人が書いた本を少なくとも30冊以上は読破している。そしてほとんどが若い頃に読んだ本の記憶によるもので、いちいち原書にあたっただけとはいえないことが多い。それでも間違っていたらいけ

ないので、確かめる程度のことはやっている。だから、いろんな異説があることも知っている。たとえば、榊原鍵吉の鉢試しが明治 20 年という説があることや、身長七尺の大石進が五尺七寸（一説に五尺三寸、あるいは六尺）で先に鉛が入った竹刀で江戸の道場を席卷したとき、顔が隠れるような四斗樽の蓋を鐔に準備したのが高柳又四郎か千葉周作か異説があることもわかっている。（山岡鉄舟は千葉周作だという。）そもそも五尺七寸もの刀を振り回すことなどできるわけがない。竹刀のためのもので、1 年目は江戸の道場を席卷したが、数年後の 2 回目の時はまったく勝てなかった。

幕末三剣豪の一説は、千葉周作、斎藤弥九郎、**桃井春蔵**の江戸三大道場の道場主で、いずれも弟子が数千人といわれる。技は千葉、位は桃井、力は斎藤と、のちにでてくる松崎浪四郎が苦し紛れに褒めたことから広まった。これを「講釈師が張り扇とともにでっちあげたものだ」と書いたのが、**山田次朗吉**である。（これに賛同したのが子母澤寛氏である。）山田次朗吉は、**榊原鍵吉**の晩年の高弟で、師匠に遅れて（三步下がって師の影を踏まず）同じ高足駄を履いて歩いている時、鍵吉の鼻緒が切れて下駄が脱げたとき、自分の履いていた下駄を即座に脱いで鍵吉の歩幅に合わせてスッと滑り込ませる。鍵吉は、歩調を乱さず、普通に歩いていく。山田は、大正時代の震災後に「**日本剣道史**」を著したが、その功績は大である。この人は、**白井亨の如き、二百年來の名人なり**。（白井については、勝海舟も褒めている。）撃剣会などには興味を示さず、師の教えを守って、東京大学の師範になったりしたが、撃剣会などには記録には残っていない。出場しなかったのだろう。・・・「三剣豪」ではなく、弟子の数が多し「三大道場」ならそうである。千葉、桃井は強かったらしいが、斎藤はやや劣る。剣術よりも学問が好きだったらしい。錬兵館は政治道場と呼ばれたそうである。

もうひとつの説が、上に述べた男谷信友らである。要は、人格・力量ともに優れた剣客をいうのであれば、男谷は剣聖とも言われたからともかく、大石や島田ははずれる。島田虎之助は、名前が強そうで、また実際に強く、男谷は自分の後継者にと考えていた節がある。しかし、まだ若く、三剣豪とまではいかない。39 才で亡くなった。勝海舟の若い頃の剣の師匠である。（勝海舟は、男谷信友とは従兄弟にあたる。父親の勝小吉が男谷より年下の叔父で、まだ若い男谷を引き連れて歩いた江戸の名物男であった。私欲のない男で、男谷も何回も驚かされたらしい。男谷も若いころには、他流試合をしなければ、と結構暴れまわっていたらしい。50 人のとび職と喧嘩をしたり、道場破りをしたり、他流試合もこなして

いる。小吉は強かったが、男谷の新太郎（信友）にはかなわねえ、と言っていた。小吉には勝海舟が自慢の息子で、貧乏御家人だったが、剣の腕は立った。私利私欲がなく、「夢酔独言」を遺した。）

大石は、筑後柳川から最初に江戸に出てきた時、男谷に初めは引き分け、2回目に勝った、という。（九州剣豪伝）（一説に、男谷に軽くあしらわれた、とも。・・・日本剣道史（子母澤寛氏は、祖父が幕臣であったことから、幕府側に立って文章を書くことが多かった。）しかし、大石の二度目の江戸遠征では、全く通用しなかった。

何が言いたいのか？ つまりはどちらも間違っている。当の勝海舟の手紙に、東都の名人・達人として、「男谷信友、千葉周作、**長沼四郎左衛門**と常陸笠間藩士の**杉浦源次兵衛**」とある。これがもっとも妥当なところだろう。つまり、**幕末三大剣豪は、男谷信友、千葉周作、（六世）長沼四郎左衛門**の3名である。

男谷信友は、のちの講武所頭取。人格力量、いずれも剣聖にふさわしい人物だったという。講武所の設立の建白をし、その頭取のひとりになっている。弟子に**榊原鍵吉**。幕末から維新にかけての達人で、その悼尾を飾る。鍵吉は、高足駄の鍵ちゃんとみんなに呼ばれ、天才肌ではなかったが、雨の日も風の日も一日も休まず三里の距離を歩いて男谷道場に通った。講武所では將軍家茂に可愛がられ、その頃日本一の槍の名手、**泥舟高橋伊勢之守**と御前試合を行って、（槍が六分、剣が四分で、槍の方が有利とされていた。）槍を相手に直心影流正規の上段に構え（通常は、槍が相手なら中段か下段に構える）、道場の先輩たちが、「鍵ちゃんて奴は何と融通の利かぬ男だろう。あれでは胸を突いてくれといっているみたいじゃないか。」とやきもきした。槍は受けようと思うな叩き落せ。剣槍試合の秘訣である。いくどか虚々実々の応酬があったのち、真槍ならば千段巻きのあたりに鍵吉の竹刀が快心の音を立て、高橋の繰り込みが一瞬遅れ、鍵吉の飛び込み面が一瞬はやく見事にきまって、一本勝ちした。何かの試合で、北辰一刀流の渋谷某と闘った時、渋谷は突きを幾度も当てるが、鍵吉の何気ない面一本で戦意を喪失した。天野将曹が表現した、普通の面を打つとビシッという表現を使うが、鍵吉の面は、**ぐあん**という衝撃だったという。明治後、新政府に仕えることを潔しとせず、いくら請われても他の剣客を推薦し、不遇のうちに亡くなった。見世物にしたなどと不評を買うことも多かった撃剣興行をおこない、多くの剣客の生活を支援した。（実際には2回だけなのだが。） 余談だが、明治になってから鍵吉の道場に薩摩から来た男がいたことがあって、鍵吉は、「あの薩摩もん只の鼠じゃねえぞ」

といつも周囲に言っていた。が、それと知るだけによく面倒を見て教えた。西南戦争で、薩摩の隊長として活躍し、「水滸伝にでてくる英雄豪傑とはこの人のような」と言われた辺見十郎太だった。戦場から山刀一口（ヒトフリ）と手紙を送ってきて感謝の念を表した。また、龍馬を暗殺したと自ら告白した見廻り組の豪剣今井信郎や、前原一誠も鍵吉の弟子である。鍵吉は太い櫛の六角棒（重さ三貫）を道場の真ん中で胡坐をかいて上下に振っていた。はじめた頃はさほどでも無かったが、次第に烈しくなるにつれて、（あまりの速さに、素振りを横から見ていると）まるで一枚の板を立てているように見えた、という。明治後に話題になったのが、明治 19 年、明治天皇の御前で、明珍の兜割りに際し、鏡心明智流の警視庁師範の 2 人が失敗したのに比べ、57 歳の鍵吉が胴田貫を下げ、ただひとり三寸五分切り込んで名誉を保った。明治天皇が思わず、アッと身を乗り出された、という。……鍵吉の上腕は周囲が一尺八寸（54.5cm）あったという。鍵吉は、「おれも年だね。もう二度と兜は割れねえよ」とにこにこしていたという。

鍵吉の生活は楽ではなかったが、話がすこし剣術から離れるが、火消しの頭取、新門辰五郎という市井の偉人がいる。勝海舟が江戸の無血開城をやりとげたとき、涙を流して、江戸市民数百万人を助けてくれた、と喜んだ。この辰五郎が榊原の生活に随分骨を折った。なんともいえない交情が随所にみられ、人の付き合いに私情をはさんで私利私欲がからむと、ろくなことがない。私欲を離れ、人情だけで付き合いとこのようなほのぼのとした心のふれあいがみられるという見本のようなものである。

鍵吉の道場にはいろんな人が入門しており、大東流合気術の武田惣角ももともと剣客を目指していたが若いころに入門している。随分ひどい目にあっただけ。息子さんが網走で合気術の道場を開いておられるという。明治大正昭和にかけての警視庁や武徳会の重鎮・内藤高治も、晩年に入門していた。剣術道場では生活が成り立たなくなって、江戸には下谷車坂の鍵吉の道場しかなくなってしまったことがあり、外国人もよく見学に来たという。外国人の弟子も多かったという。鍵吉の好んだ言葉が、

国雖大好戦必亡

天下雖安怠戦危

高橋伊勢之守も同様に明治政府に仕えなかった。慶喜が離さなかったのもあるが、息子さんがのちに剣道家として名声を馳せた。……ちなみに、幕末三舟とは、勝海舟、高橋泥舟と山岡鉄舟である。高橋泥舟はもともとが山岡姓で、養子にはいったのち兄が急死した

ため（水死説と今で言う熱中症か脚気衝心の異説がある。）、鉄舟が高橋の妹を妻として養子にはいったもので、義理の兄弟になる。（山岡は、相撲取りの話の中で書いたが、酒を7升呑んだ翌朝、友人は宿酔いでふらふらになったが、約束どおり成田山にお参りに行った。のち、慶喜に命じられて官軍総督に直訴して、実際には西郷隆盛と交渉し、江戸を戦火から守ったり、天皇の側近になったりした。明治中期に禅の修行とともに悟るところがあり、無刀流を興した。この頃には強くなっている。それまでは、単に胡散臭い大男だったという。）

千葉周作らが三剣豪と呼ばれるようになるのは、この人たちの弟子に尊皇攘夷の連中が多くいて明治後に出世して、宣伝もしやすかったことも一因だろう。千葉周作の玄武館から清河八郎や伊東甲子太郎、桶町千葉から坂本竜馬、斎藤弥九郎の練兵館から長州藩士が多く輩出し、桂小五郎や肥前大村藩の渡辺昇などは塾頭になっているし、高杉晋作も江戸に出て仏生寺弥介とは仲がよかった。桃井道場からは、武市半平太がでてくる。稽古の前後に、いわば仲間内でそういう話題になっていった可能性が高い。

もうひとつ、幕末といえば暗殺が盛んに行われた時代である。彼らが強かったと信じている人も多そうだが、暗殺する相手が相手だから（つまり剣客ではない）、本当に強かったかどうか。生き残ったのは、西南戦争で敗れた桐野利秋（中村半次郎）くらいのものだ。示現流（自顕流）には、歩きながら止まることなく抜き打ちできる呼吸法があるという。その上、中村は用心深いところがあり、ちょっと出かけるにしても必ず誰かと一緒にしか出なかった。

榊原健吉と桃井春蔵（この人が道場主になってから三大道場になった。）は仲がよく、家茂の護衛として京にいた頃、3人で3倍の人数の薩摩藩士と闘う羽目になったが、ふたりで3人ずつ倒し、のこりは逃げたというが、これが中村半次郎だったという説もある。健吉も人斬り健吉と呼ばれたこともある。

さて、幕末といえば、新選組だろう。（新選組か新撰組か、表記が一定しないようにしたが、近藤自身がどちらも書いている。）新選組については、子母澤寛氏が、いわゆる「新選組三部作」を著し、生き残りの人から直接話を聞いてそれを記録する、という歴史学における一手法を築いた。「人みな自分を飾る」から、そのなかから選別しなければならない。

子母澤寛は勝海舟についても、「父子鷹」「おとこ鷹」を著した。

天然理心流西へ。仏生寺弥介の部分でも述べたが、竹刀剣術では三流以下だが、真剣で京洛を闊歩した。大阪までも行き、殺戮集団の名を欲しいままにした。初めは、芹沢鴨一派が主流であったが、これを暗殺することにより、近藤一派が主流になった。剣術の専門家集団で、達人はいくらでもいるが、**斎藤一**、**永倉新八**、**沖田総司**の3人が突出しているという。沖田は結核のため早逝したが、斎藤も永倉も大正時代まで生きた。永倉新八は、晩年は小樽に住むにいたるのだが、新選組解散のあと、しばらく沖田総司を診ていた松本良順に面倒をみてもらっていた。(筆者註：松本良順は、オランダ人ポンペが長崎医学伝習所で西洋医学を教えていたとき、幕府から派遣された医師でポンペ唯一の弟子である。その他の門下生は、形の上では松本良順の弟子である。松本良順も家茂に可愛がられ最期まで看取った。彼の弟が函館まで行き、解放される時、自分ひとりが解放されるのはいやだ、と突っぱねた男である。英語に堪能でのちに駐英大使になり、日露戦争の直前日英同盟の主役になった。) 次いで、松前藩に復帰し、藩医の杉村に見込まれ、その娘の婿養子になった。剣術師範などをしていたが、極悪非道のやくざまがいの用心棒を何人か雇っている男に談判しに行き、人助けをしたが、このとき、その親分や用心棒・子分など7～8人の片腕を切り落とした。「あれは、新選組の永倉新八だ」と聞いて、親分は仇討ちするといきまっていたのだが、諦めてしまった。

北海道の集治監(監獄)には政治犯や凶悪犯が内地から送られてきていて、脱走したことがよくあった。樺戸集治監でも脱走があり、この逮捕に杉村(永倉)が呼ばれ、主犯を一太刀で首を刎ねて絶命させ、のこりの数人を逮捕したりした。3年師範をしていた。

のち東京に出て、剣術道場を開いたりした。京都にも出かけて、実の娘に逢ったり、壬生の八木源之丞宅を訪ね、孫の為五郎氏に逢ったりした。為五郎氏も遺談を残している。晩年は、子息が成功したこともあり、小樽に住んで孫の守三昧で悠々自適の生活を送り、時々札幌まで行き、剣術師範などをしていたらしいが、大正4年に大往生を遂げた。小樽での武勇伝といえば、子息が芝居小屋を経営していて、下足番をしていた。無法者が調子に乗って新八翁を小突き回す。さすがに怒って気合をいれると、眼光炯炯、背筋も伸び、にらみつけただけでチンピラたちはこそこそと逃げて行った、という。「永倉新八翁遺談」を遺した。たとえば、「沖田の剣は猛者の剣、斎藤の剣は無敵の剣」とか、新選組の活躍とかについて記憶を辿っている。

斎藤一は、明石藩脱藩と称していたが、新撰組に入隊するのもやや遅く、会津の目付け役だともいう。会津藩で戦い（このときには、山口二郎・次郎）、会津に殉じて斗南まで行ったことからみて、かなり説得力があるが、父親が御家人の株を買ったらしいことなどから、現在では、会津出身というのは否定されている。戊辰戦争後、**土方歳三**にも従って闘ったが、土方に命令されて江戸に戻った。明治後に警察局に勤務した。このときには、斎藤一ではなく、**藤田五郎**である。新撰組時代には、流儀を言わず、一刀流と言っていたが、神道無念流という。しかし、永倉もそうだから、ちょっと信じ難い。むしろ無外流とか、いろんな流派のいいところだけをとった一刀流の方が信用しやすい。会津なら溝口流だが、太子流も学んだという。 いろんな流派があるが、

男谷信友のいう、剣術は剣術でいいではないか、が正論である。こういうところもこの人の偉いところである。

司馬さんの書いた小説に、「・・・新撰組結成いらいの奇蹟的な生き残りで、・・・剣の精妙さは京都のころから鬼斎藤といわれ（稽古でも容赦しないでかなり荒っぽかった）、京都時代はおそらく三十人は斬ったであろう。

が、かすり傷一つ負わなかった。のちに東京高等師範学校をはじめ、諸学校に剣術を教えに行ったことがあるが、三段、四段の連中がむらがって掛かってきても、籠手一つかすらせなかった。」（筆者註：剣術は段位制ではなく、級を採用していたが、明治 41 年東京高等師範学校で初めて段位を用いたが、三段四段が、明治 20 年ごろの四級に相当する。内藤高治や川崎善三郎などもこのクラスであるから強い方である。斎藤一（藤田五郎）も、警視庁にいたころは四級だった。つまり、同じ程度と思われていたのだが、じつは大きな隔たりがあったということである。当然といえば当然で、実戦では、籠手をかすられることで以後の闘いに不利になる。命がかかっている。のちにでてくるが、**モノが違う**のである。）

別の人の話では、東京高等師範学校の学生が、竹刀にもかすらなかったという。つまりは音無の構えである。

斎藤一と斎藤一諾斎とは別人で、斎藤一は、明治 10 年頃から 24 年まで警視庁の剣術師範をしているから、司馬さんの小説とは食い違う。一諾斎は、土方の生まれ故郷のそばで

寺子屋を開いて子女の教育に携わったとある。一諾齋は、甲州鎮撫隊を組織するときに徵募に応じて新選組に入隊した。落城した松前藩主夫人を東京まで、松本捨助とともに送り届けた。松本捨助は、剣の腕は大したことはなかったが、敵の中に飛び込んでいく時、「新選組！松本捨助！」と名乗りをあげながらだったという。恐怖心が少なかった男らしい。

強かったのは、斎藤一である。警視庁では、上田馬之允からいきなり籠手をとって竹刀を叩き落とし、慌てさせている。(だから、兜割りに上田馬之允が選ばれた理由が不明瞭である。上田馬之允は、桃井の小天狗と呼ばれたらしいが、記録に残る大きな試合では、負けることが多い剣客である。兜割りのときも、「松田の喧嘩もなまくらになった」などといわれた。薩摩藩を訪れた時、日向の某が、胴もつけずにでてきたので、かたわらの松の木に胴を巻き、これを一撃でばらばらにしてしまうし、四分板を吊るして突きで貫いた、という。西郷も桐野も見ていたらしいが、こういう時しか勝っていない。) 斎藤一は警視庁にいるときに警察抜刀隊に所属して西南戦争に従軍し、かなりの人数を倒し、最後に桐野利秋(中村半次郎)を三段突きで斃したという。これは眉唾で、あまりにも数奇過ぎる。桐野の死因は、額への銃弾である。この抜刀隊には、会津の佐川官兵衛(西軍を悩ませた東軍の将)と仙台の細谷十太夫(どちらも当然ながら変名での参加である。)が同行していた。細谷は、仙台からす組を組織し、町人ややくざ者を使っての夜襲が得意で西軍を散々に悩ませた男である。細谷がらすと十六ささげ、なけりゃ官軍高枕、と官軍が自嘲しながら噂にしたほど、恐れられた。 結局、斎藤一は、新選組以来 100 人以上斬ってきたことになる。

斎藤一と永倉新八とが 10 数年ぶりに逢ったらしいのだが、一晩中話しても話は尽きなかった。他の元新選組の連中同士が逢った時にも積もる話があったことだろう。

また、斎藤一は警視庁退職(明治 24 年)後、東京高等師範学校付属東京教育博物館の守衛長をしていた。勤務ぶりはまじめで、剣道場からの音が聞こえてくると武者窓から眺めていた。いたずら好きの学生が、中に入って来いよ。なんなら稽古をしていってもいいぞ、とからかうつもりで面籠手胴をつけさせ、無理矢理稽古をさせる。(このあたり、あさり売りから剣客になり、千葉周作の師匠にまでなった浅利又七郎の話をも髣髴させる。) リーダーは、年寄りだから手加減をしろ、と言う。いざ立ち合うと年寄りどころか、竹刀ばかりがぐーんと迫ってくる。脂汗を流して目をつむって突いてでたが、軽く胴を打たれた。のこりの 7~8 人にむかって「みなさん・・・一度にどうぞ」みな暴れ者ばかりだからお

のれ、とばかりに一度にかかっていったが、身のこなしがまったく違う。竹刀に触れることもできず、籠手、胴、面と立て続けにやられてしまった。お、おやじ・・・おまえは一体何者なんだ・・・と尋ねる声が震えていたという。「すごいオヤジだ！」といううわさが広まり、明治 40 年ごろから師範の**高野佐三郎**に聞こえ、高野が会いにくると、斎藤一（藤田五郎）である。高野は、明治 20 年頃警視庁に奉職早々で試合はしなかったが、大先輩の**梶川義正**から、「・・・西南戦争の抜刀隊で活躍した男で・・・もとは新鮮組の生き残りだ。あいつの剣は本物の人斬りだよ」と聞かされていたから、当然よく知っている。「あなたでしたか・・・」そして学生たちに、「おまえたちが東になっても、この人にかなうはずがない」それから東京高等師範学校などいろんところで教えるようになったという。明治 32 年には、女高師の庶務兼会計係をしていた。いずれも旧会津藩士の引きである。背は高い方、無口で、眉毛がふさふさしており、眼が炯炯と輝いていて、いかにもいかめしい風貌だったそうである。

新選組の名を高からしめたのは、池田屋事件である。念のため、二手に分かれて待機していたが、もう待てないということで、近藤、永倉、沖田、藤堂のわずか 4 人で、20 数人に向かって突然切り込んで行って、当時の倒幕派の重鎮を幾人も倒した。長州の吉田稔麿、杉山松助、肥後の宮部鼎蔵、松田重助、土佐の北添侷麿などおもだったものが殺害され、このため明治維新が一年遅れたといわれる。（逆にいえば、幕府が一年延命した。）吉田稔麿など、松下村塾でもっとも優秀といわれ、明治後、今生きていれば据え置きの総理大臣だろう、といわれるようになったが、この日もリーダー格で、一旦逃れて藩邸に戻り応援をたのんだあと、現場に引き返し（このあたりのことが、この人の尊敬されるところである。）、沖田総司に子ども扱いされて討ち死にした。吉田稔麿は、神道無念流で強かったという説と、ほとんど剣術をしていなかった、という説がある。・・・この時に、沖田は初めて嗜血している。

この池田屋斬り込みのとき、「・・・沖田は凄かった。あいつが一番斬った。どの相手も一刀で・・・強い奴でも二、三合で倒していた。」（永倉新八翁遺談）

沖田の突きといえば非常な難剣で、壬生（新選組屯所）の道場でも、隊士の中で受けとめる者がなかった。

まず青眼から刃をキラリと左横に寝かせる。どん、と足を鳴らして踏み込んだときには腕は伸びきり刀は間合いを衝いて相手を串刺しにした。沖田の突きは、三段といわれた。

たとえ相手はその初動の突きを払いのけても、沖田の突きは終了せず、そのまま、さらに突き、瞬息、引く。さらに突いた。この動作が一挙動に見えるほど速かった。この突きで、つぎつぎに相手は斃された。

永倉が言う、「(沖田には) 土方歳三、井上源三郎、藤堂平助、山南敬助などが竹刀を持っては子ども扱いされた。恐らく本気で立ち合ったら師匠の近藤もやられるだろうと皆が言っていた。」

別の人は、「この(天然理心)流の『突き』は必ず三本に出る。しかも刀の刃を下とか上とかへ向けて行く大抵の剣法と違って、勇をはじめ、刀を平らに寝かせて刃は常に外側へ向け、突いて出てもし万に一つ突き損じても、何処かを斬るという法をとった。

やっ!とあって、一度電(イナズマ)のように突いて行って、手答えがあっても無くても、石火の早業で、糸を引くように刀を再び手許へ引くと、間髪を容れずにまた突く、これを引くとも一度行く。この三つの業が、全く凝身一体、一つになって、即ちこの三本で完全な突の一本となる事となっている。

や、や、や、と足拍子三つが、一つに聞こえ、三本仕掛けが、一技(ヒトワザ)とより見えぬ沖田の稽古には、同流他流を問わず、感心せぬものはなかった。」(日野宿彦五郎嗣子佐藤俊宣翁談)

沖田総司の三段突きの凄さがわかる。つまり、足の動きだけを追いかけると、まず、右足を出す。(手は突いている)次に左足を右足のところに寄せる。(このとき手は引いてきている)、さらに右足を前に出す(手は前に突いている)。左足を右足のところに寄せてくる(このとき、手は引いてきている)。さらに右足を前に出す(手は前に突き出している)。

これを一挙手の間に三たび繰り返すのである。相手は、防ぎきれないだろう。目にもとまらぬ早業である。

土方歳三は、函館まで旧幕府に殉じて、戦い続けた。軍艦の上で、歴戦の勇士たちに人を斬るコツを伝授する。

「よいか、人を斬る剣は所詮は度胸である。剣技はつまるところ、面の斬撃と突き以外にない。ならい覚えた区々たる剣技の末梢をわすれることだ」

と、歳三は、甲板上で右足を踏み出し、ざらりと和泉守兼定をぬいた。

瞬間、凄みがあたりに満ち、陸兵も海員もみな声をのんだ。京都の頃、史上、もっとも

多くの武士を斬ってきた男が、ここで殺人法の実技をみせようとしている。・・・

歳三の前にハンモックが、袋に包んで立てられている。

踏み込んだ。

和泉守兼定が陽光にきらめいたかと思うと、そのハンモックはタテ真二つになってころがった。

「腰を」

歳三は自分の腰をたたいた。

「腰をぐっと押して行って相手の臍にくっつけるところまで行って斬れ。切尖で切るのは臆病者のやることだ、刀はかならず物打で切る。逃げながら相手の胴を払ったり、籠手をたたいて身をかわすような小技はするな。」

斎藤一もおなじようなことを言っている。戦闘中は、相手がこうきたら、こちらはこの手を使って、などと悠長なことをしておれない。夢中で刀をふりまわして、気がつけば相手が倒れている。

新選組といえば、近藤勇について触れるべきだろう。

甲州鎮撫が失敗に終わり、江戸の片田舎から出て、位人身を極めた（約束では十万石の大名）が、流山で西軍に投降した。結局、そこで斬罪になるのだが、これは、土佐藩出身の谷干城（西南戦争で熊本城籠城の指揮官）が、坂本龍馬を殺害したのが新選組だと信じ込んでいたことや、水戸脱藩の香川敬三など並以下の士道しか持たないくせに岩倉具視に取り入って偉くなったようなのが指揮官でいたこともある。有馬藤太は、大正 10 年を過ぎても、「・・・近藤は敵であったが、徳川氏にとっては非常な忠臣じゃ。その上、彼は断じて皇室に鋒を向けるものではない。しかも神妙に降伏している。地を換えて考えれば、決して憎むべき人物ではないのじゃ。中村半次郎や野津兄弟（鎮雄、道貫）なども『おれらがいたら、決して殺させるんじゃなかった、立派な人物を惜しいことをした』と言って非常に悔しがった。『近藤という人物は一種の英傑で、拙者はたしかに大鳥圭介以上の人物であったと思う』と無闇に腹を立てては、若い頃から事ある度にこの一件を語ったものである。大鳥圭介は、土方とともに函館まで行ったが、土方の評判の良さと比べ、あいつは臆病者だと馬鹿にされていた人物である。明治の頭官になった。土方歳三にしても、今陸軍にいたらなあ、という声もあった。

あとは、明治になり、明治 9 年廃刀令がだされ、戦争以外では、真剣を使うことはなく

なった。明治の初期・中期には、幕末の生き残りが無数にいたから、竹刀剣術であっても迫力があつたに違いない。明治中期までの名人達人は、枚挙に暇がない。高橋道太郎（高橋泥舟の嫡男）が上田美忠（馬之允）と激戦し、高橋が勝った。松崎浪四郎、梶川義正、得能関四郎や門奈正、真貝忠篤、下江秀太郎、三橋鑑一郎などなど幕末以来の錚錚たる名前があがる。内藤高治が常陸の北辰一刀流から出現し、川崎善三郎や高野佐三郎が敗れ、内藤は結局警視庁に奉職するなど、警視庁が剣術の中心になっている。明治年代は、高野佐三郎、川崎善三郎、高橋赳太郎の三傑三郎、さらに中野博道、内藤高治。内藤高治の人物は、熱誠に溢れた豪傑型で人格高潔、無欲恬淡の真の武士といわれたが、酒を好み、詩や歌も詠み、厳しい反面愉快的な人物で、多くの人々に愛された“豪傑”であったと伝えられる。内藤高治は、審判をしていて選手が自分の後ろに回って行っても決して振り向かず、それでもどちらが一本取ったかの判定を間違ったことがない、という。心眼で見ているから、耳があるから、と言っていた。この人の甥が、のちの横綱常陸山。御大（オンタイ）という表現は昔からあるが、常にそう呼ばれ出したのは常陸山が横綱を引退してかららしい。この言葉の対象にふさわしい人物である。

松崎浪四郎は、江戸時代からの生き残りで、当時の斎藤弥九郎の三男、鬼歎と戦って体当たりで倒されたときに、咄嗟に払った胴で勝ったというが、時期的にこの二人が会うことはなかったようで、新太郎（二代目弥九郎）ではないか、と言われている。（鬼歎の歎之助は若くして中風を発症し、40年間以上静養したという。）松崎浪四郎も、大いに明治剣術界の発展に寄与した。

明治後期、30年から数年間は園部秀雄女史の独壇場である。（すでに述べた。）

明治中期から大正時代になると、高野佐三郎、川崎善三郎、高橋赳太郎、（この3人が三傑三郎と呼ばれ、その他中山博道、斎村五郎、堀田捨次郎、高野茂義、内藤高治ら、多士濟々である。この剣士たちが勝ったり負けたり、引き分けたりした。ある試合では、双方ともに技をだすことができず、そのまま引き分けになり、息詰まる闘いだっただことがわかる名勝負だったらしい。京都に武徳会本部ができ、三橋鑑一郎に請われて、内藤は京都武徳会に行った。

東の高野佐三郎、西の内藤高治で、一時代を築いた。

大正時代に、上遠野秀忠という範士がいた。高野佐三郎と中野博道範士の対談にでてくるのだが、範士号をもらう頃にはほとんど盲目になっていたという。この人と稽古をする

とき、最初に剣先一寸ほどを合わせて距離感をつかむ。すると突然、籠手がくる。わかっていても籠手をくらってしまう。お二人ともよくやられたらしい。

高野佐三郎は、秩父水滸伝によれば、秩父の小天狗といわれたが、ある剣士と戦って突きで敗れた。その竹刀には先端に鮫皮がまきつけてあり、被害者は手ひどい傷を負う。そのため、秩父だけで褒められては大成しないことに気づき、東京に出て修行する。さらには復讐のために春風館の弟子になった。のち、大成してから、相手は真剣で戦うというのを親友の川崎善三郎が木刀を持って駆けつけ、相手は真剣、高野は木刀で戦って勝利をおさめた。高野佐三郎の弟子には、範士はいくらでもいるが、ある弟子が表現する、「先生が門下生をご指導になる稽古ぶりを、正座して拝見していると、その技の見事さに感にたえて、一撃一突に、ため息をつきながら、我を忘れて見とれていたものである。とくに先生得意の上段の構えの見事さは、昔の美しい錦絵を見るようで、**高野の前に高野なし、高野の後に高野なし**、とってよいほど立派なものであった。」あるいは、「もっとも眼を見張ったのは、かかってくる人の胴を、後に退りながら右、左を連続して、数本も打つことであった。夢のような気持ちで見惚れていたものである。」などなど、多くの範士たちが口を極めて褒めることである。多彩な技、親切な指導、引き立て上手、理合にかなう技、などなど、褒め言葉に限りがない。この人が近世最大の達人かもしれない。

昭和4年、全日本選士権大会が天覧試合として開催され、高野茂義範士（高野佐三郎の養子）に勝った持田盛二範士が日本一に輝いた。のち、十段。このとき、「先人がもらっていないのに、私だけが頂くわけにはいかない」と固辞したという。「剣聖」と呼ばれた。ちなみに、十段位は、5人である。持田範士は、人格も優れ、80歳のとき、六段の元軍人と稽古をしたが、悠然たるもので、元軍人の六段だけが汗びっしょりになって、とにかく、打ち込む隙がなかった、という。一度だけ、TVの画面で稽古の姿を見たことがあるが、流れるようなしなやかな動きで、まるで舞いを見ているかのようであった。持田盛二範士の父親が、最初のところで書いた榎本法神の法神流の師範をしていて、群馬県あたりではこの流派は人気があったらしい。

その後、中山博道範士が「剣聖」と呼ばれた。明治以後、剣聖と呼ばれたのは、他に高野佐三郎、持田盛二くらいのものである。

どうもこの頃が幕末以来の剣道全盛期だったらしい。

戦争中の話であるが、切り口を見れば、どの程度の力の持ち主かわかったという。三段くらいまでは、突きだけだが、四段以上になると、横面など多彩な技がでていたという。戦前の四段といえ、戦後では六段七段に相当する。

薩摩の示現流（自顕流）の話がほとんどでてこなかったが、江戸時代、日本は鎖国をしていたが、薩摩は、さらにその中でも鎖国をしていたようなものであった。だから、よくわからなかった面がある。他藩との交流がなかったからである。この流には段位というものがなく、無名の名人・達人が輩出した。肩から臍まで一撃で斬った傷をみれば薩摩人が斬ったとわかる。見る人の心胆を寒からしめた。寺田屋の変では、右肩から斜めにと左肩から斜めにと斬ったため、V字型に首が飛んで、首の無い死体が2〜3歩歩いた、という。名前はわかっているが、別に有名な剣客でもない。新選組でもどの藩の剣客でも、示現流の第一撃をかわすことに腐心した。竹刀剣術では、その強さが実感できなかったのだろう。辺見十郎太が鍵吉のところに行ったことや篠原国幹が別の江戸の道場にいたことなどから、なんとなくわかるような気がする。その実力が示されたのは、西南戦争が最後である。警察抜刀隊が到着するまで、鎮台の兵士は逃げまわっていたという。（警察抜刀隊の連中は、官軍に最後まで抵抗したメンバーが多く、敵意が違っていた。）また、秀吉の朝鮮戦役での活躍も「シーマンズ」と記録が残っているそうだし、関ヶ原でも敵中突破で、1000人が数十人にまで減って主君を薩摩まで連れて帰ったり、豪強の名前を轟かせた。

また薩摩人特有の惻隠の情というのか、いたるところで見られた。奥羽戦争で、千葉周作の高弟、南総飯野藩の森要蔵と虎雄親子の奮戦振りが話題になった。猩猩緋の陣羽織の、虎雄の雄姿がひととき目立った。「あの赤陣羽織を斬れ」と目標にされたが、近づいてみるとまだ少年（15歳）である。「や、こやつ兵児じゃったか」と口々に叫んで薩州兵は一瞬たじろいだ。中村半次郎が、「その兵児を斬るな！」薩州兵もほっとした。・・・結局流れ弾に当たって虎雄は戦死したのだが、その夜、薩軍の一陣営では祭壇を設け、陣羽織の上に虎雄の首を飾り、帯刀を引き添え、酒を供えた薩州兵たちが、しめやかに酒を酌み交しながら、虎雄の奮戦ぶりを称えてやまなかった。・・・虎雄の霊を慰める、僧侶の読経に代えて薩州兵らが歌う哀調にしめった琉球節は、ながく余韻を残して二本松の夜空に流れた。

この森要蔵の血筋から、昭和9年の天覧試合で、府県選抜剣士の部で優勝したのが、野

間恒錬士（26歳）で、その後渡米し、全米フェンシングのチャンピオンになっている。野間、といえば、講談社の創業一族にあたる。

この稿を改訂したのは、学生時代に買って読まずにいた「秩父水滸伝」を思い出して読んだことがある。こののちも新たな資料が見つければ書き直す可能性はある。さらに、50年来の友人が、コラムをずっと読んでいて、今、手抜きしとるな、とか、この剣術については、かなり気に入って書いてるな、とか判ると言ったから、より充実させたかったからである。

2013.10.16.